

ワイトゲンシュタインの『確実性について』を心理学的視点から読む

星川 啓 慈

論文要旨

これまで、ワイトゲンシュタインの絶筆『確実性について』における「確実性」は、「論理(学)的」なものであり、「心理(学)的」に解釈してはいけない、とされてきた。このことは、ワイトゲンシュタイン自身によっても、また研究者によっても、主張されている。

しかしながら、筆者はかなり以前から、このことに疑問を抱いてきた。論理的なものとはそう明確に割り切れるものではないし、ワイトゲンシュタインは心理(学)的に「確実なもの」を求めているようにも読めるからだ。これは『確実性について』のテキストにも現われている。

最近、精神科医によって、ワイトゲンシュタインの病理学的研究がかなりなされている。そのこととも関連するが、本稿においては、「確実性」を死の二日前まで執拗に追い求める彼の営みを、「幼少期に獲得されたはずの(ベイシクトラスト)を再確認するためのもの」として捉えてみたい。

はじめに

有名なブランケンブルク(Blankenburg, W.)の『自明性の喪失』(原書出版一九七一年)は、若い女性店員アンネ・ラウ(仮名)という一人の精神病(破瓜病)患者について書かれた研究書である。筆者は、このラウという女性が失っているもの、つまり「自然な自明性」(natürliches Selbstverständlichkeit)と、ワイトゲンシュタインが追い求めたもの、つまり「確実性」(Gewisheit/Sicherheit)とは深いレベルで同じものだと思うている。もちろん、二人はまったく違った人間であり、ラウは病のために二六歳で自殺するが、ワイトゲンシュタインは自殺を考えながらもそのつど

強靱な思索力で生き延びた。その反面、やはり二人には共通する面も多い、と推測できる。

さらにいえば、ラウが失いワイトゲンシュタインが求めたもの、つまり、世界の自明性／確実性は、われわれが生きていくうえで絶対に必要なものである。ただし、そうしたものは通常われわれに意識されることはない。その理由は、それらはあまりにも当たり前すぎるからである。普通の人間のように平々凡々とは人生を生きられず、特殊な感覚を身につけた二人が心底から求めたものを知ることが、われわれが生きていくために必要でありながら、認識の対象にならないものを凝視させてくれる。

本稿では、ワイトゲンシュタインの絶筆となった『確実性について』^③（以下『確実性』）を素材に、人生の最終段階においても「確実なるもの」「自明なるもの」を追い求めた彼の姿を浮彫りにする。この書については、古くはモラウエッツ (Morawetz, T.) の『ワイトゲンシュタインと知』^④（原書出版一九七三年）、最近では鬼界彰夫氏の『ワイトゲンシュタインはこう考えた』^⑤（二〇〇三年）の最終部分など、まとまった論者がすでにある。しかし本稿では、ワイトゲンシュタインの哲学的な研究から離れて、心理学的視点から、『確実性』で書かれている内容を考察してみたい。つまり、『確実性』をワイトゲンシュタインのベイシククトラスト（基本的信頼）の再獲得の過程^⑥として解釈してみたいのだ。

一 ウイトゲンシュタインの「確実性」の追求

『確実性について』という絶筆

『確実性』は、ワイトゲンシュタインの絶筆となったノートであり、その執筆時期は、一九四九年の終わり／一九五〇年の初めから、死（一九五一年四月二九日）の二日前までである。つまり、彼が死にいたる一年半ほどの思索の過程がそこに示されている。

一九四九年の中頃、ワイトゲンシュタインはアメリカのイサカにいる教え子のマルコム (Malcolm, N.) の家に滞在し、そこでムーア (Moore, G.E.) の論文「常識の擁護」「外界の証明」などにみられる命題について、マルコムたちと議論した。すなわち、ムーアの「自分が確実に知っているいくつかの命題が存在する」という主張と、ワイトゲンシュタイン自身の中に育ってきていた見解とをつき合せながら、「確実なるもの」をめぐる思索を展開したのである。そうした命題とは、「ここに手が一つあり——もう一つの手がここにある」「大地は私の誕生のはるか以前から存在していた」などという、普通の人間にはあまりにも当たり前で、議論の対象になる理由すらわからないような命題である。

一九四九年十一月、六〇歳のワイトゲンシュタインは、ケンブリッジのベヴァン (Bewen, E.) 医師から前立腺癌であると告げられ、余命は長くても二年であることを知る。翌一二月から一九五〇年三月までウィーンの実家に滞在するが、そのとき、不要と判断したノート類を焼却している。鬼界氏

がいうように「生の終わりが確実に意識され始めていた」⁽⁷⁾のであろう。

ワイトゲンシュタインの最後の一年半にわたる思索は、『確実性』を読む限り、それまでの思索と同様に、粘り強く強靱である。癌との闘いであった人生の最後の一カ月半のあいだは、病状の変化はあつたにせよ、マルコムあての手紙から判断できるように、精神的に比較的安定した時間をすごしたと推測できる。⁽⁸⁾

しかし、よく知られているように、ワイトゲンシュタインの生涯は決して穏やかなものではなかった。中井久夫氏は「ワイトゲンシュタインの生涯はたえざる危機の連続であつた。いかなる職も、いかなる科学も、いかなる土地も彼を休らわせなかつた。彼は（自分は呪われている）」と半ば真剣に感じていた⁽⁹⁾と言ひ、新宮一成氏は『論理哲学論考』（以下『論考』）における「ワイトゲンシュタインの独我論が、宇宙を包む至高体験と、實在に對置され無化される恐怖との振幅運動を惹き起こすものであり、分裂病世界と関係が深い⁽¹⁰⁾」ことを指摘している。さらに、アスペルガー症候群の症状が見られるワイトゲンシュタインは、精神的にかなり不安定な生涯を生きたといえる。中井氏は『確実性』を書いているころのワイトゲンシュタインについても、「最晩年の彼は、たえず内的涸渇感にさいなまされながら探究を続け、それは胃癌（前立腺癌）を病んでいることを知つてからも変わらなかつた⁽¹¹⁾」という。

筆者にとつて興味があるのは、ウ・イ・ト・ゲ・ン・シ・ユ・タ・イ・ンはどうして人・生・の・最・後・の・一・年・半・の・あ・い・だ、右・の・よ・う・な・当・た・り・前・で、平・凡・で、そ・れ・ら・に・つ・い・て考えるのは無駄だとさえ思われる自・明・な・命・題と格闘したのか、ということである。哲学的な思索に身を切るような思いをしつづけたワイトゲンシュタインにとつては、思索の流れから、そうした主題と取り組むにいたる自然で必然的な理由もあつたかもしれない。しかしながら、彼が最後に取り組んだのは、「確実なもの」「自明なもの」をめぐる主題であり、このことは、精神的な問題をかかえる彼の人生を考えると、示唆的である。

じつは、ワイトゲンシュタインの書いたものには、一貫して「日常性」「平凡さ」などについてかなり言及されている。一見、曖昧な日常言語を否定する論理学の書に見える『論考』には、意外にも次のように明言されている。

……日常言語の命題はすべて、そのあるがままの現実においてすでに、「記号や概念文字で書かれていなくても、」論理的に完璧な秩序を与えられている。——われわれが日常の言語のうちで提示せざるをえない、かのもつとも簡潔なもの、それは真理の比喩ではなく、全き真理そのものなのだ。⁽¹²⁾

また、『哲学探究』（以下『探究』）には次のように書かれている。

ワイトゲンシュタインの『確実性について』を心理学的視点から読む

……われわれにとつてもつとも重要なものごとの様態は、その単純さと平凡さによつて隠されている。(ひとはこのことに気づかない、——それがいつも眼前にあるからである。)人間の探究の本来的基盤は、まったく人間を驚かすことがない。……このことは、いったん目にすればもつとも驚くべく、もつとも強烈なものが、われわれを驚かさなまいということである。¹³⁾

要するに、彼は、究極的に——というのは、彼の思考はつねに揺れ動きながら進展するから——日常的なもの／平凡なものを肯定的に捉えようとしており、彼が取り組んだ多くの主題はそれらと深い関係にあるといえる。

ただしもちろん、ウイトゲンシュタインは日常性に安住の地を見出したのではない。日常的な事柄から多くの主題をとつてきている『探究』に、「日常性の回復による治癒への意志」を読み取ることは不可能ではない。しかし、内海健氏が述べるように、それは「単に日常性への回復を志向することによつて達成されるものではないし、まして日常が特権化されるわけではない」。日常性は「つねにその擬制を暴き出される」¹⁴⁾のである。

こうしたことを絶筆となつた『確実性』と結びつけてみると、次のように言えるのではないか。一見したところでは、日常的なもの／平凡なものは「確実な」ものであるように見える。しかし、ウイトゲンシュタインには、それらは決して「確実ではない」ように見えてくる。けれども、さらにまたそれらについて考え続けると、どうしようもなく、それらのあり方を肯定しなければならぬ地点に到達する。「とにかく、こうだ!」「私はこのように行動するしかない!」ということになるのだ。このことを表現するウイトゲンシュタインの言葉は『確実性』に散見する。

ところで、もろもろの知識の内容は、異なる「確実度」(Grad der Gewissheit)をもつ。

「太陽からしかじかの距離にひとつの惑星が存在する」という命題と「ここにひとつの手がある」(すなわち私の手が)という命題では、この(概念的な(言語的な)状況が違ふ。「疑いを免れている」第二の命題を仮設とは呼べない。にもかかわらず、両者のあいだに明確な境界線は存在しない(五二節)。「だがそれでも、」惑星の場合から自分の手の場合へと、誤りの蓋然性が次第に減じていくのではない。ある一点で誤りを想像することもできなくなるのだ(五四節)。確実度「に」は最大値(Maximum)がある(三八六節)。

第一のタイプの命題は疑うことができるが、われわれの世界像を構成している第二のタイプの命題は疑うことができない。「確実度が最大値」をしめすからである。ウイトゲンシュタインが考察の対象とするのは、こうした第二の命題に類するものである。

そうして、ウイトゲンシュタインは「世界に何が生じようと、私の確信をくつがえすことはできない」(三八〇節)という境地にいたる。彼いわく、「この事実は私にとつて、あらゆる認識の基礎なのである。ほかの事なら取り消すこともあろうが、この事実だけはべつである」(同所)。そして、こうし

た確信／信念に、基礎づけや根拠づけを与えることは出来ない——「基礎づけられた信念の基礎になっているのは、何ものによっても基礎づけられない信念である」(二五三節)。

しかし、くり返しになるが、ワイトゲンシュタインの場合、このような地点／境涯に到達したら、そこでお終いになるのではない。彼はまた、自問自答しながら緊張した思索を続ける。哲学的思索のおよそ五〇年にわたる旅において、彼は安住の地を見出せなかった。だが、大きくみれば、揺れ動きながらも、最後の一年半においては、安住の地を垣間見たといえるのではないか。もちろん、そこに安住する時間は彼には残されてはいなかったのだが……。

別の言い方をしよう。ワイトゲンシュタインが人生の最後の最後で「確実性」「自明性」についての思索を展開したことは、意識のレベルにおいてもまた無意識のレベルでも、生涯にわたって彼が「確実なもの」「自明なもの」を求め続けていたことを、意味するのではないか。そしておそらく、全生涯にわたって種々の不安を抱えながらも、ようやく最後の一年半において、彼は安住の地を垣間見たのである。

ワイトゲンシュタインが最後に残した言葉は、「彼らに言ってみてください。私の人生は素晴らし(wonderful)かった、と」である。この言葉の解釈をめぐっては、彼を直接に知る人、間接に知る人の間で、じつにさまざまな解釈がある。筆者には、最終的に「確実なるもの」を垣間見られたことが、「私の人生は素晴らしかった」といえた間接的理由の一つだと思えてならない。人間というものは、その最期に臨むとき、「自分が生きた世界は確実なりアリティをもっていた」と思いながら死にたくなるものではないか……。

予想される批判——論理と心理

筆者の話には、ワイトゲンシュタインに心をよせる哲学研究者たちから反論がでることは、火をみるより明らかである。さまざまな批判が予想されるが、最も重要なものは次のようなものである——「論理(学)」的・確実さ／自明性と「心理(学)」的・確実さ／自明性とはまったく異質なものである、両者を同一次元で議論することはナンセンスである。

その証拠にワイトゲンシュタインは、次のように論じている。

……われわれが表現しようとするのは主観的な(心理的な)確信ではなく、最強の確信ですらない。ある種の命題が、あらゆる疑問、あらゆる思考の根底をなすように見えるという、そのことを言おうとするのである。(四一五節)

私は言いたい、物理学のゲームは算数のゲームと同様に確実であると。……私の指摘は論理的な(logisch)もので、心理学的な(psychologisch)ものではないのだ。(四四七節)

ワイトゲンシュタインの『確実性について』を心理学的視点から読む

ウイトゲンシュタインが『確実性』において追求した「確実性」は、論理(学)的なものである。これに疑いはない。鬼界氏も「確実性や自明性とは個人の心的状態ではなく、ある命題の言語における論理的機能の認知そのものである」と主張している。筆者もまったく同感である。さらに、モラウエッツは「論理(学)的」ということを細かく分析している。^⑬

だが、それを承知で次のように問いたい。「論理的」確実性／自明性と「心理的」確実性／自明性とはまったく別のもので、両者を結び付けることはできないのだろうか……。ウイトゲンシュタインが追い求めた論理的確実性／自明性は、同時に、心理的確実性／自明性にはならないか……。もちろん、論理学の理論的な議論にはいつていくと、そのように言えない場合もでてくるだろう。しかし、本稿の文脈においては、たぶん個人の場合でも共同体的場合でも、論理的に確実／自明であるものは、心理的に確実／自明である。

これまで、哲学の側からは「論理」と「心理」とは水と油のように考えられてきた。それは、ウイトゲンシュタイン自身の言葉や鬼界氏の言葉にも反映されている。もちろん、そのことについては否定しない。しかし、両者が渾然一体となっている場合もある。『確実性』で論じられている「確実性」「自明性」には、多分に心理的側面があるのだ。大筋においてウイトゲンシュタイン自身がそれを否定しているのだが、彼には、次のような言葉もある。

こう言いたい。人間は或る点では完全無欠な確実性をもって真理を認識する、というのではない。完全な確実性とは、態度(Einstellung)に關係する事柄にすぎないのだ。(四〇四節)

前後の脈絡をふまえてのさまざまな解釈はあるだろう。ウイトゲンシュタイン自身も「だが勿論、この言いかたにもまだ誤りがある」(四〇五節)と続けている。しかし、「態度」というものは、論理的確実性ととも心理的確実性によって裏打ちされているものである。

ウイトゲンシュタインが、われわれの枠組み／世界像を構成する諸命題に主観的ではない論理学的地位を授けようとしたということは、それらに心理的な確実性以上の確実性を与えようとしたのだとも解釈しうる。だが、このことは裏からいえば、そうせざるをえなかつたという彼の精神的な事情があつたということではないだろうか。すなわち、世界像命題に論理的な確実性を授けるということが、心理的に要請されたのである。だとすれば、論理的確実さを追い求めさせたのは、けっきよくは心理的な要請であつたということにならないか。すなわち、ウイトゲンシュタインが求めた論理(学)的・確実さとは、心理(学)的・確実さの裏返しなのである。

以下の論考では、この観点から『確実性』におけるウイトゲンシュタインの議論をみていきたい。

二 『確実性について』の議論

絶筆の直前

ワイトゲンシュタインは、一九五一年四月二十九日に他界するが、同二七日に「書く」という生涯にわたる営為を終えた。『確実性』は全部で六七六節からなっているが、絶筆となった日は、六七〇節から六七六節までの七つの節を書いている。その日は「間違える」可能性について議論している。六七三節から六七五節までを引用しよう。

私が間違えることがありえない場合と、きわめて間違えにくい場合とを区別することは困難ではないだろうか。どちらの種類に属する場合であるのか、つねに明瞭に判別されるであろうか。私はそうは思わない。(六七三節)

私が間違えることはありえない、と正当に主張できるような場合がいくつもあり、それらはまたいくつかの特定のタイプに分れる。そしてムーアは、そうした事例の若干を提示したのであった。／私にしても、典型的な場合をいくつも挙げることはできるが、それらに共通する特徴を示すことはできない。(某氏は、自分が数日前にアメリカからイギリスにやって来たということについて、間違えるはずがない。それ以外を可能と見做すようなら、彼の頭はよほどいかれているのである。)(六七四節)

数日前に自分は飛行機でアメリカからイギリスに来た、と誰かが信じていれば、私も、彼がそれについて間違えているはずはないと信じる。／自分は今机に向かって書きものをしている、と誰かが言う場合も同様である。(六七五節)

ワイトゲンシュタインによるこの日の書付は、いつさい推敲されていない。そのままの思索が提示されている。推敲する時間があれば、最終的に、彼はまったく違うことを書いた可能性もある。しかし、ポイントは、絶筆となる数行前まで、彼は「間違えるはずのないもの」「確実なるもの」もの位置づけをしようとしていたことである。揺れ動きながらも、彼は「間違えるはずのないもの」「確実なるもの」を求めていたのである。

ところで、ワイトゲンシュタインは六七四節では「某氏」といい、六七五節では「誰か」という。しかし、これは彼自身のことではないか。なぜなら、少し前にアメリカのマルコムところに行つてイギリスに帰つてきたのは彼自身だし、「今机に向かって書きものをしている」のも彼自身だからである。そこで、六七五節をワイトゲンシュタイン自身にあてはめれば、「自分は今机に向かって書きものをしている、と私が言う場合も間違えているはずがない」と彼は「信じ」ているのである。言いかえれば、彼は死を前に、自分が机で書き物をしていることを「確実」だとしたのである。現在、筆者はそうした状況にいてはいるわけではないが、将来的に死を目前にすれば、「確実な」事柄を確信しながら／「確実な」世界に自分は生きたと確信しながら、

「死にたい」と思うようになる気がしてならない。

ムーア命題の特徴

ワイトゲンシュタインの『確実性』はムーアの命題／主張との格闘である。まず、ムーアの挙げた命題とはどういうものかを、見ることから始めよう。くり返しになるが、彼があげた命題とは、「ここに手が一つあり——もう一つの手がここにある」「大地は私の誕生のはるか以前から存在していた」などというものであった。ワイトゲンシュタインは「そもそも実生活において、ここに手があるということ（それも私自身の手があるということ）をことさらに確かめる場合があるだろうか」（九節）と問いかけるが、そうした命題の正しさを確かめる場合など、ないのである。また、「大地が存在するということは……私の信念の出発点になっている全体的な像 (Bild) の一部分なのである」（二〇九節）。

ワイトゲンシュタインの言葉でムーアの命題を要約すると、「ムーアが知っている」と主張する真理は、彼がそれを知っているのならわれわれも皆知っている、と言つて差支えないような真理」（二〇〇節）であり、「ムーアが選んだのは、皆がムーア同様に知っており、しかもどうやって知るかを述べることができないような場合（『命題』）（八四節）」なのだ。

さらに、ワイトゲンシュタインは次のように論じる。

そこに手があることをムーアが知っている、ということが問題なのではない。もしもムーアが、「私がいま間違えているということも勿論ありうる」と言つたとすれば、これはわれわれにとつて、まったく理解不可能である。問題はそこにあるのだ。われわれはこう問うだろう。「それは一体どんな誤謬なのであるか。」——例えばそれが誤謬であることはどのようにして発見されるのか。と。（三二節）

ムーアが「知っている」ことを述べる諸命題は、ことごとく、その反対を信じる理由を想像するのが困難な命題である。例えばムーアは生涯を大地からほとんど離れることなく過ごした、という命題のように。ここでも私は、ムーアでなく自分自身のこととして語つてよい。その反対を私に信じさせるようなものがあるだろうか。「ない。」記憶であろうと、ひとの言葉であろうと。——私が見聞したことすべては、大地から遠く離れて存在した人間は（い）ないことを確信させる。私の世界像にはその反対を信じさせるようなものは含まれていない。（九三節）

一言でいうならば、ムーアの挙げた命題は、われわれが誰でも知っており（二〇〇節、八四節）、間違ひである可能性を免れている（三二節、九四節）ような命題なのだ。そして、こうした諸命題がわれわれの「世界像 (Weltbild)」を構成しているのである。

たしかに、ワイトゲンシュタインには、「知識」の対象になるものは「間違える可能性」がなければならぬ、という主張がある。しかし、右の「知識」

は、真理と虚偽、正しいことと間違つたことなどを超越しており、それらの区別を支えるものであり、われわれが端的に引き受けるべきものである。

数学と経験世界

ワイトゲンシュタインは『確実性』全体において、数学／算数や記号論理学という抽象的な論議領界でのことを問題にしているのではない。「手」や「大地」などのような、生活と密接にかかわる事柄についての命題が考察の中心である。

しかし、ワイトゲンシュタインは、数学などの経験とはかけ離れたように見えるものでも、経験の世界と接続させようとしている。数学や論理学の領域での話と、われわれの経験の世界を直結させようというのである。すなわち、それらも、われわれの経験世界の中で伝達・習得されたものだ。その過程は、まさしく経験にほかならない。そしてそのうえで、数学や算数の命題とムーア流の経験命題とを、ともに「確実なもの」とするのである。

われわれは計算の本質を、計算の仕方を通じて知つたのだ。(四五節)

私は $12 \times 12 \parallel 144$ を間違えるはずがない。ところでわれわれは、もはや数学的な確実性を経験命題の相対的な不確実性と対比するわけにはいかない。何故なら、数学的な命題は一連の行動を通じて得られたもので、それらの行動は、ほかの生活的な営みと少しも違つたものではなく、同じように忘却や、見落しや、錯覚の危険に曝されているからである。(六五一節)

$12 \times 12 \parallel 144$ という式が疑いのそとにあるとすれば、非・数学的な命題についても同じことが認められねばならぬ。(六五三節)

……算数の命題(例えば九々)が「絶対に確実」であることを不思議に思うひとはいえないのに、「これが私の手である」という命題が同様に確実であると言われて、どうしてそんなに驚かなければならないのか。(四四八節)

論理的命題

ワイトゲンシュタインは、先の例のような具体的「経験命題」(つまり「ここに手が一つあり——もう一つの手がここにある」という類の命題)にある種の「論理的」地位(「蝶番」のような地位)を与えようとしている。すなわち、そうした命題にわれわれが生きていくときの枠組み／世界像を構成するような地位をあたえようというのだ。ドアがわれわれの生活だとすると、そのドアを支えている蝶番にあたるものが、ある種の論理的地位をもつたムーア流の諸命題である。これらの命題が成立しなくなれば(蝶番が壊れたとすれば)、われわれの生活はなりたたない(ドアはきちんと機能しなくなる)。

「論理的」というのは文脈によつて変わるが、基本的に「疑いの対象から除外されている」ということである。問題の本質は、ムーア流の命

題の中に「われわれが絶対に確かだと見なすべきものがある」(一二二節)という点である。このことについて、ワイトゲンシュタインは次のように語っている。

かくかくのことを知^つて^いる、と言^つてムーアが枚挙する命題は、われわれが特別なテストをしないで肯定するような経験命題ばかりである。つまり、経験命題の体系の中で一種の論理的な役割を演じる命題に限られている。(二三六節)

……われわれが立てる問題と疑義は、ある種の命題が疑いの対象から除外され、問や疑いを動かす蝶番のような役割をしているからこそ成り立つのである。(三四一節)

「この計算に間違いなどあるはずはない」というのはどんな種類の命題か。論理的な命題と言わざるをえないだろう。だがそれは「自明であるがゆえに」用いられることのない論理学である。(五一節)

例えば、「地球が最近一〇〇年間存在していた」ことについて、私が誤りの可能性を認めた語り方をすれば、「それによつて〈誤謬〉と〈真理〉がわれわれの生活の中で演じている役割が変わってしまう」(二三八節)のである。ある種の経験命題が、疑いの可能性を免れ、「真であることが、われわれが依拠する枠組の一部をなしている」(八三節)。「この〔地球は遙かな昔から存在していたという〕命題は、われわれが営む言語ゲームの体系全体の基礎にあたるものである。この想定は行動の基盤であり、したがって当然思考の基盤でもある、と言える」(四一一節)。

こうしたムーアの流の経験命題は、心理的にも確実／自明でなくてはならないだろう。そうでなければ、われわれが生きていくための枠組み／世界像が揺らいでしまい、われわれは安心して生活できないことになる。それゆえ、「ここに手が一つあり——もう一つの手がここにある」という命題は、われわれの生活のなかである種の確固たる「論理的確実さ」をもつと同時に、「心理的な確実さ」をもつ／もたざるをえない、とはいえないか。そして、ワイトゲンシュタインはそうした命題に対してすなおに、「心理的な確実さ」を感じるべきでなかったのではないか。だからこそ、その不安を克服するために、死に至るまで執拗に、そうした命題と格闘したのではなかったか。

「論理」と「心理」の問題

「はじめに」でも書いたが、以上のような「論理(学)的確実さをもつた命題」と「心理(学)的確実さをもつた命題」とは異なる。ワイトゲンシュタイン自身もこの二つを混同することを戒めている。そのことは、例えば、次のような節に反映されている。

「この判断を疑うくらいなら、私は一切の判断を放棄しなければならぬ。」／だがそれは一体どういう判断なのか。……それは……心理学に属するものではない。むしろ規則の性格をもっている。(四九四節)

「知識」と「確実性」は異なったカテゴリーに属する。それは……ふたつの精神状態ではない。……今われわれが問題にしているのは、「心理的な」確実性ではなくて知識である。およそ判断なるものが可能であるためには、「心理状態とは関係なく」ある種の経験命題はまったく疑いを免れていなければならない、ということが大切なのだ。(三〇八節)

あることが確実である、とわれわれが言うのはどういう場合か。／それが確実であるかどうかは議論の対象となりうる。客観的に確実という意味であるならば。／われわれが確実と見なしている(ムーア流の命題のような)一般的な経験命題が無数に存在する。(二七三節)

……われわれが表現しようとするのは主観的な確信ではなく、最強の確信ですらない。ある種の命題が、あらゆる疑問、あらゆる思考の根底をなすように見えるという、そのことを言おうとするのである。(四一五節)

しかしながら、論理的なもの、心理的なもの、知識と確実性との峻別は微妙である。

たとえば、先に引用した四一五節には「われわれが表現しようとするのは主観的な『心理的な』確信ではなく、最強の確信ですらない」とあったが、この文章の前には、実は次のように書かれているのだ。

……「知る」という言葉は哲学的な用途をもつのに、「確信する」の方はそうでないのはなぜか。あきらかに、それではあまりに主観的になりすぎるからだ。しかし知ることも同様に主観的ではないのか。「私は P を知っている」からは「 P 」が帰結するという文法上の特徴に、われわれが惑わされているだけなのではないか。

「知る」ことも「確信する」ことと「同様に主観的」である可能性は否定しきれないのである。次に二四五節を見てみよう。

……私が何かを知っている、ということとは主観的な確実性とは違う。主観的なのはあくまでも確実性の方で (Subjektiv ist die Gewissheit)、知識ではない。したがって私が、「私に両手があることを私は知っている」と自分に言い聞かせ、しかもそれによって主観的な確実性を越えたものを表現しようとするのなら、私の正しさを私自身に納得させることができなければならない。しかしそれは不可能だ。なぜなら私に両手があるということは、両手を見詰める前にすでに確実なことであり、見詰めたからといって確実性に変りがあるわけではない(からだ)。にもかかわらず、

「私に両手がある、というのは絶対に揺がぬ信念 (unumstößlicher Glaube) である」と言つて差支えないはずだ。(二四五節、傍点引用者) 問題にしたいのは、最初の二つの文章と最後の文章である。まず、最初の二つの文章からは、そもそも『確実性』で議論している「確実性」は「主観的なものである」ということがわかる。また、最後の文章からは、「私に両手がある」という主観的ではない知識は、同時に、主観的な「絶対に揺るがぬ信念」でもあるということがわかる。

さらに、一七四節では「私は絶対の確信をもつて行為する。しかしこの確実性は私だけのもの(主観的なもの)なのだ (diese Gewissheit ist meine eigene)」と明言されている。その「確信」は何に対する確信かという「知識」に対する確信である。「私に両手がある」「地球は遙かな昔から存在していた」という知識は、誰もが認めるものであった。しかし、その知識の確実性は「私だけのもの」、つまり、個人的なもの、主観的なものだというのである。

少々強引な解釈かもしれないけれども、以上のような引用から判断して、ワイトゲンシュタインは、論理学や知識論上の確実性と心理や主観とかかわる確実性とを峻別しようとしたが、そこには彼の揺らぎも垣間見える。すなわち、前者には後者が付きまとい、両者を峻別することは、それほど簡単なことではないのだ。

「疑い」は「疑いえないもの」に支えられている

ワイトゲンシュタインいわく、「すべてを疑おうとする者は、疑うところまで行き着くこともできないだろう。疑いのゲームはすでに確実性を前提している」(一一五節)。

私に両手があることを、今の今、疑うとしたらどうだろう。「両手の存在を疑うとしたら、私はそれ以外の何を信じるというのか。私にはこの疑いに場所を与えるような体系の持ち合せがないのである」(二四七節)。どこをどう見回しても、「私に両手があること」を疑う根拠を見出せない(一二三節参照)。とにかく、私はどこかで信用することを始めなければならぬのではないか。つまり、「どこかで疑いを遮断して事を始めなければならない。これは恕すべき軽率さといったものではなく、判断作用そのもののありかたなのだ」(一一五〇節)。

「疑いの欠如がその「疑いという」言語ゲームの本質に属」(三七〇節)する。疑わない振る舞いが存在するところにのみ、疑う振る舞いがあり(三五四節参照)、「疑いえないものに支えられてこそ疑いが成立するのである」(五一九節)。「あらゆる理性的な疑いを超越した確実性」(四一六節)。

ムーア流の命題を疑つて何になろう。それらを疑うとしても、それはわれわれの生活に実際的な結果をもたらさない。疑つたからといって、それまでの生活が変わるわけではないのだ。ワイトゲンシュタインは懐疑論者を一蹴してこういう——「疑うことで何の違いも生じないのなら、好きなように疑わせておけばよいのではないか」(一二〇節)。

行動と疑いの欠如

「疑いの欠如」(この表現はけつして悪いことを意味するのではない)というのは、「私には両手がある」といった知識においてのみならず、われわれの行動のいたるところで現われている。ワイトゲンシュタインは次のような例を挙げている。

〔われわれは毎日ドアを開け閉めするが、そのさい、ドアの存在を疑うことなく端的にドアを開け閉めしている。〕「私が君を呼んだら、ドアを開けて入って来てくれたまえ」という言語ゲームを想像してみよ。普通の場合なら、そこに本当にドアがあるかどうか、と疑うことは不可能である。(三九一節)

私が実験を行なう場合、眼前の実験器具の存在を疑うことはしない。私が疑うことはいくらもあるが、それを疑うことはしないのだ。(三三七節)

〔われわれはほとんど毎日計算をしているが、計算の仕方の妥当性について考えることはない。〕これが計算の仕方であり、こういう状況では計算を無条件に確かなもの、絶対に正しいものとして取り扱う。それだけだ。(三九九節)

私はなぜ、椅子から立ち上がろうとするとき自分にまだ両足があるかどうか確かめようとしなのか。理由はない。そうしなだけのことである。それがすなわち行動である。(一四八節)

総じて、「われわれが或る信念を抛りどころにして安心して行動するという事実がある以上、われわれの疑いえぬことが数多く存在することに何の不思議があるだろうか」(三三二節)ということになる。そして、多くの行動について、「いささかの疑いもまじえず確信的に行動するであろうということ、これだけは間違いないことである」(三六〇節)。さらに、「言語ゲームの根柢になっているのは……われわれの営む行為こそそれ」(二〇四節)なのであり、「われわれの信念に根柢がないことを洞察する、これが難しいのだ」(一六六節)。

世界像・言語ゲームの変化

確実なもの、自明なものは、絶対に変わらないのだろうか。この点については、ワイトゲンシュタインは微妙である。彼いわく、「言語ゲームというものは時とともに変化する」(二五六節)。さらに、次のようにも言われる。

私〔ワイトゲンシュタイン〕は英国にいる。——周囲のすべては私にそう告げる。私の思考をどうさまよわせ、どこまで転がしてみても、その

ワイトゲンシュタインの『確実性について』を心理学的視点から読む

真理は動かない。だが私が今夢想だにしないような事どもが生じたとしたら、私はやはり迷うのではなからうか。(四二二節)

まったく前代未聞のことが起ったとしたらどうだろう。例えば家々がはつきりした原因もなく次第に蒸発してしまう。あるいは牧場の動物が逆立ちをし、ほほえみ、人語を発する。あるいは立ち並ぶ樹木が次々に人間と化し、逆に人間は樹木に変わる。こうした奇怪事をすべて目撃しながら、私がおも、「私はあれが家だということを知っている」等々、あるいは単にあれは家である等々と言ったとしても、私は正しいことになるであろうか。(五二三節)

こうした箇所を読めば、ワイトゲンシュタインは世界像命題が変化する可能性を認めていた、ないし、世界像命題といえども揺らぐことがあるという不安をかかえていた、ともいえる。だが、彼は、その可能性を感じながらも、そうした命題が変化しないほうに賭けていたのではないか。それは、右の五二三節につづく五一四節や五一六節で示唆されている。

この言明〔「あれは家である」等々〕こそ私には根本的なものと見えた。これが偽であるとすれば、「真」とは、また「偽」とは、そもそも何であるのか。(五一四節)

私に自分の名〔L・W〕を疑わせるために、何事かが演出された(例えば誰かが私に何かを告げるとか)としよう。その場合、疑いの根拠そのものを疑わしく思わせるものも必ず存在するはずである。したがって私は、これまでの信念を固持する方に決断してよいわけである。(五一六節)

五一六節に関連して、次のような連鎖を想定できるだろう。①世界像命題が肯定される↓②世界像命題を疑わせる論拠が主張される(このとき世界像命題は否定される)↓③世界像命題を疑わせる論拠を疑わせる論拠が主張される(このとき世界像命題は肯定される)↓④世界像命題を疑わせる論拠を疑わせる論拠を疑わせる論拠が主張される(このとき世界像命題は否定される)……。こういう事態が延々とつづくのであれば、「これまでの信念を固持する方に決断してよい」のである。さらに、ワイトゲンシュタインは次のように語っている。

……「世界に何が生じようと、私の確信をくつがえすことはできない。」この事実は私にとって、あらゆる認識の基礎なのである。ほかの事なら取り消すこともあろうが、この事実はべつである。(三八〇節)

さらに、体調も悪化の一途をたどっていただろうと推測される、絶筆の前日(死の三日前)には、次のような強い意志の表明が見られる。

……現に私が間違えているにしても、私には、「こんなことが私が間違えるはずはない」と主張する権利がある。(六六三節)

エリクソンの「ベシクトラスト」とワイトゲンシュタインの「子供」

『確実性』には、われわれが確実だとする命題はわれわれに先立つ人たちから受け継いだものである、ということが述べられている。たとえば、「これら(地球が私の誕生の遙か以前から存在するなど)の知識の総体は私に伝承されたものである」(二八八節)、「われわれには何かが基礎として教えられなければならない」(四四九節)など。

このことと関連して、『確実性』では「子供」という言葉が頻繁に使用される。周りの大人が子供にさまざまな知識(世界像命題)をあたえるのだ。ところで、エリクソンは「ベシクトラスト」(基本的信頼)という概念を創出したが、幼少期に自分の回りの世界や他者にたいする「基本的な信頼」が醸成されなければ、将来その子供にはなんらかの支障があらわれる、という。筆者には、ワイトゲンシュタインとエリクソンの言っていることが、どこかで結びつくような気がする。すなわち、『確実性』の一部は、子供にベシクトラストが植えつけられる様子を述べているような気がするのだ。

われわれは子供に「それは君の手だ」と教え、それは多分(あるいは(蓋然的に))君の手だ」とは教えない。子供は彼の手に関係のある無数の言語ゲームをそのようにして学ぶのである。「これは本当に手なのか」という探究や疑問は、彼の思いも及ばぬところである。(三七四節)

子供は、その(話題になつている)山がはるか昔から存在していたことなど、まったく学ばない。本当にそうかどうか、という問は決して生まれない。子供は、いわば、自分が学ぶことと一緒にこの帰結も呑みこんでしまうのだ。(二四三節)

子供の頃、われわれはさまざまな事実を学び、それを信じる。例えば誰でも脳をもっているということ、濠州大陸が存在し、その形はしかじかであるということ、私には曾祖父母があるということ、私の両親と称している人たちが実際に私の両親であるといったことなどである。こういう信念がまったく言葉にあらわされず、そうした事どもについて一度も考えたことがなくとも差支えはない。(二五九節)

子供は大人を信用することによつて学ぶ。疑うことは信じることのあとに来る。(二六〇節)

私は子供の時から、判断の仕方をこうして学んできた。これがすなわち判断である、と。(二二八節)

私は判断するすべをそのようにして学んだ。それがまさに判断である、と覚えこんだのだ。(二二九節)

以上は、普通の子供が種々の知識や体験を身につける仕方である。しかしながら、すなわにそれらが身につかない場合もあるだろう。その場合に対して、「精神障礙」／「錯乱状態」(Geistesstörung)、「狂気の沙汰」(Wahnsinn)という表現が使用されることがある。

ワイトゲンシュタインの『確実性について』を心理学的視点から読む

人間はある状況においては決して誤ることができない。……もしもムーアが、彼が確実であると宣言する命題の反対を言うとしたら、われわれは同意しないばかりでなく、彼は錯乱状態に陥っているのだと考えるであろう。(一五五節)

ある日突然私の友人が、これまで長い間〔現在住んでいる場所とは異なる〕しかしかの場所で暮してきた、といった類のことを想像するようになったとしたら、私はそれを誤謬とは呼ぶまい。多分一過性の精神障礙であると見なすであろう。(七一節)

私・L・Wは、友人の身体や頭に鋸屑が詰まってはいない、と信じて疑わない。……それを疑うことは狂気の沙汰としか思えない。(二八一節)

疑う余地のない命題に対して反論しようとする者には、「馬鹿げている」と言うだけでよいだろう。つまり答えるのではなく、正気づけてやるのだ。(四九五節)

こうした節を読むと、ひよつとしたら、ウイトゲンシュタイン自身が自分の一側面を意識しながら述べているのではないか、という気にもなる。すなわち、前述したように、彼には世界像命題を全面的には肯定できなくなる心理状態に陥るような時があり、右のような文章を書くこととは、そこに没入しないための方策ともとれるわけだ。確実なる命題を疑うことは、「精神障礙」「錯乱状態」「狂気」なのであり、その状態に陥ってはならない、と自分に言い聞かせているウイトゲンシュタインの姿が筆者の目には浮かぶ。

おわりに

冒頭で、ブランケンブルクの『自明性の喪失』に言及した。「分裂病は、とりわけ人間的な病気であるように思われる」(傍点原著者^[1])というブランケンブルクは、「コモン・センス〔常識〕」というのはそれが月並みできわめて自明なものであるという点に目をうばわれて、とかくあまりにも見逃され易いが、哲学的にも経験的にも非常に注目すべき、独特の基底的な機能である」^[2]という。ウイトゲンシュタインも、アンネ・ラウのように、「常識／日常性の病理」を病んでいたのではないか。

そのラウは、「道筋」「考えかた」「枠組」などという言葉を用いて、人生に処していくために必要なものを表現している。ラウは次のように語っている(《》内がブランケンブルクが引用したラウの言葉)。

《だれもがなにかしら道筋を、考えかたをもっています。そんなふうになんか大きくなってきて、性格をもつて、そんなふうになんか育てられて。……ほかの人たちはそういうことで行動しているんです。そしてだれもがともかくもそんなふうにおとなになつてきたのです。考えたり、行動の仕方を決めたり、態度を決めたりするのも、それによつてやつていっているんです……》。それが《毎日の、いいえ毎日の暮しではなくて、人生そのものがわかつていっていること》なのである。《大人になつた人なら、大きくなるときにそれもいっしょに身につけて大きくなつてくるんです。そういうときには、それが自然と身につくのです。あたりまえのこととそうでないことが、ちゃんとわかるようになるのです。私にとつては、そんなことはどこか遠い遠い世界の話みたいですが。私はなにもかも、まづもつて頭で考えてみなくてはならないのです。ほかの人のようにいろいろのことを感じることができるのは、ずつとずつと先のことなのです。……《人生というのか……それはいつもなにかこう枠組 (Rahmen) というのか、そんなものの中で動いているのです》。(どんな枠組の中で?) 《それがわからないのです。その場その場で、まるつきり態度を変えなきゃなりません。……それが私にはまるでわからないのです》。

ラウは日常の共同生活を規定している暗黙の前提(「道筋」「考えかた」「枠組」などと訳されているものとはほぼ同じと考えてよい)を「Spielregeln」(規則、規定、決まり)と呼んだ。²⁰⁾ その一方で、ワイトゲンシュタインの「言語ゲーム」は「Sprachspiel」であり、それと関連付けて議論される「規則」は「Regel」である。辞書でみるかぎり、「Spiel」には、「生きること」という意味はなさそうだが。しかし、ラウやワイトゲンシュタインの「Spiel」には、辞書の意味を超えて、「生きること」という意味合いが濃い。筆者は、言語ゲームをプレイすることは、生きることにそのものだと考えている。生きるための前提となるもの、普通の生を営ませるもの、それが「Regel」ではないのか。²¹⁾ 厳密な考察が必要であり、即断はさけるべきだとしても、筆者は、こうしたところにも、ラウとワイトゲンシュタインが共通して求めているものを感じる。

ラウが喪失して求めたもの、ワイトゲンシュタインが喪失はしなかつたがそれをめぐって苦闘したもの、それはおそらく共通のものである——「自明なるもの」「確実なるもの」だ。そして、それはまた、われわれ人間が暗黙のうちに、無意識に前提しているものであり、われわれの生を根底から支えているものである。これを失うと、われわれは普通の生活ができなくなる。そうだとすれば、ラウとワイトゲンシュタインという、通常の人間とは異質な感覚を身につけた二人の言葉は、われわれにとつてもつとも身近なものでもつとも重要なものについての言葉だということになる。

最後に、前に引用したワイトゲンシュタインの『哲学探究』の言葉をふたたび引用して、本稿を終えたい。

……われわれにとつてもつとも重要なものごとの様態は、その単純さと平凡さによつて隠されている。(ひとはこのことに気づかない、——それがいつも眼前にあるからである。)

註

- (1) W・ブランケンブルク『自明性の喪失——分裂病の現象学』木村敏ほか訳、みすず書房、二〇〇三年。(Wolfgang Blankenburg (1971) *Der Verlust der natürlichen Selbstverständlichkeit: Ein Beitrag zur psychopathologie symptomarmer Schizophrenien*. Stuttgart: Ferdinand Enke Verlag.)
- (2) 同訳書、五八頁、八三頁、参照。
- (3) L・ワイトゲンシュタイン『確実性の問題』(ワイトゲンシュタイン全集第九巻)所収、黒田亘訳、大修館書店、一九七七年。(Ludwig Wittgenstein (1969) *Über Gewißheit*. G.F.M. Anscombe and G.H.von Wright (Eds.), Oxford: Basil Blackwell.) 引用箇所は本文において節番号で示す。なお、本文では、『確実性の問題』ではなく、原題の『確実性について』としている。
- (4) T・モラウエッツ『ワイトゲンシュタインと知——『確実性の問題』の考察』菅豊彦訳、産業図書、一九八三年。(Thomas Morawetz (1978) *Wittgenstein and Knowledge: The Importance of On Certainty*. Massachusetts: The University of Massachusetts Press.)
- (5) 鬼界彰夫『ワイトゲンシュタインはこう考えた——哲学的思考の全軌跡 1912-1951』講談社、二〇〇三年。その第五部(三三七〜四一七頁)には『確実性』のテキストの成り立ちやその内容についての詳しい論考がある。
- 鬼界氏によれば、『確実性』は第一部から第四部までにわけられ、その「内部構造」は重要である(三四六頁、参照)。また、たしかにどのようなテキストでも「文脈」というのは大切である。だがここでは、
- テキストの「内部構造」は無視して、諸節をいったんばらして、そこから議論を再構成したい。すなわち、何度もうり返される議論、ワイトゲンシュタインの頭から離れなかつた議論を拾っていきたい。
- (6) ウイトゲンシュタインは四歳ころまで言葉を話さなかつたらしいが、彼の幼少期についてはあまり知られていない。このことについては、次の文献を参照のこと。R・モンク『ワイトゲンシュタイン1・2』岡田雅勝訳、みすず書房、一三頁、一九九四年。(Ray Monk (1990) *Ludwig Wittgenstein: The Duty of Genius*. New York: The Free Press.) 本の稿の主題が「ワイトゲンシュタインのベイシックトラスト再獲得の過程」とはいえ、彼が幼少期にベイシックトラストを身につけたか否かは、詳しい資料がないので、ここでは問題としない。おそらく彼は、幼少期にベイシックトラストを身につけただろう。しかし、彼はその生涯の最後の段階で、その種の確実性をふたたび求めたと思われる。
- (7) 鬼界、前掲書、三四四頁。
- (8) N・マルコムほか『回想のワイトゲンシュタイン』藤本隆志訳、法政大学出版局、一六六頁、一九八九年、参照。(Norman Malcolm (1958) *Ludwig Wittgenstein: A Memoir, with a Biographical Sketch by G.H. von Wright*. London: Oxford University Press.) そこにあるワイトゲンシュタインの書簡には、次のように書かれている。「異常なことが起こりました。一月ほど前、わたしは突然、自分が哲学をするのにふさわしい心の状態にあることを発見しました。自分が二度と再び哲学できないことは絶対にたしかだと思っていました。二年以上もたつてはじめて、わたしの頭の中にかかっていた幕があがったのです。……現在このことがわたしを大いに元気づけてくれるのです」。また、彼は「常に起伏を

くり返しているある種の弱さを別にすれば、わたしは最近非常に気分がよい」とも述べている。

- (9) 飯田真・中井久夫『天才の精神病理——科学的創造の秘密』中央公論社、一五二頁、一九九三年。

- (10) 新宮一成『無意識の病理学』金剛出版、一九八九年。引用は次の文献による。内海健「ウイトゲンシュタイン——零度の狂気」、『分裂病』の消滅——精神病理学を超えて』青土社、二〇三頁、二〇〇三年。

- (11) 飯田・中井、前掲書、一五一頁。

- (12) ウイトゲンシュタイン『論理哲学論考』坂井秀寿訳、法政大学出版局、五・五五六三、一九七六年。(Ludwig Wittgenstein (1961) *Tractatus Logico-Philosophicus*. Oxford: Routledge & Kegan Paul Ltd.)

- (13) ウイトゲンシュタイン『哲学探究』(「ウイトゲンシュタイン全集第八巻」)藤本隆志訳、大修館書店、一二九節、一九七九年。(Ludwig Wittgenstein (1958) *Philosophical Investigations*. G.E.M. Anscombe and R. Rhees (Eds.), Oxford: Basil Blackwell & Mott, Ltd.)

- (14) 内海、前掲論文、二〇八頁。

- (15) 鬼界、前掲書、三六〇頁。

- (16) モラウエッツ、前掲訳書、第二章、参照。

- (17) ブランケンブルク、前掲訳書、三頁。

- (18) 同訳書、iii頁。

- (19) 同訳書、一三三頁。

- (20) 同訳書、一三三頁、参照。この「Spielregeln」は、シュトラーウス(Straus, E.)の「日常世界の公理」(「Axiome der Alltagswelt」)とも深い関係にある。

- (21) ウイトゲンシュタインには、「まず規則があり、行為はそれにしたがう」と考える場合と、「まず行為があり、規則はそれにしたがう」と考える場合とがある。ここでは、前者の場合を念頭においている。